

## 平成30年度 学修行動調査 結果報告

I R委員会

### 【調査結果の概要】

#### 大学全体

以下の各学科・専攻のまとめから、学生は、真摯に学修行動を振り返り、現状を把握していることが分かる。CAP制、GPAの導入により自主的な学習の時間が増え、各学科のディプロマポリシーに沿った学修成果が現れてきている。ただ、本調査が「必回答」ではなかったため回答率が低く、全体の傾向を反映しているというにはデータ量が不足している。

#### 1) 日本語日本文学科

昨年度に比して大きな変化はないが、例年値の低い「外国語の能力」の向上を実感する学生が増えたのは特筆に値する。「外国語」をはじめ、学生が「苦手」とする項目に改善が見られることから、彼らに対するステレオタイプな評価を見直し、現状に合ったカリキュラムを再構築する必要がある。

#### 2) 歴史文化学科

昨年度と比べ、歴史文化学科の学生は参考資料や資料収集の面において、図書館を有効に利用しつつ、Webでの情報収集にも優れていることが分かった。

#### 3) 教育学科幼児教育専攻

「1週間の時間の使い方」において前年度と比べ、「授業の予習・復習」・「授業以外の自主学習」が増加していることから、「授業」を基盤にしなが、さらに専門的なことや知らなかったことを学ぶという学習の基本が習慣化しつつあることが窺えた。「授業での経験」として「学生の資料調査」・「学生同士の議論」といった「学生が主体的に関わっていく授業」を実感していたことや「授業と日常生活の関係性の説明」といった「学びの意義を教えてください」を実感していたことは好ましい。

#### 4) 教育学科学校教育専攻

「授業の予習・復習」が増加しているが、その反面「授業・実験への参加」・「授業以外の自主学習」・「読書」が減少していることから、課された学習については時間をかけているが、自分から学ぶための時間はあまりとれていないと思われる。「大学入学時と比べて身についた能力・知識」のうち、「科学的・数量的な見方」・「外国語の能力」が「かなり身についた」とした学生は、10-15%減少した。今後、「理数教育の充実」と「外国語能力の向上」を目指す必要があると思われる。

#### 5) 教育学科特別支援教育専攻

「授業での経験」として「学生が主体的に関わっていく授業」を実感していたことは好ましい。一方、「大学入学時と比べて身についた能力・知識」として「データに基づいた科学的な見方」・「PCのスキル」・「幅広い知識」・「周辺の課題」を挙げていたことは、卒業後、教職に就く際、いずれも重要であり好ましい。しかしその反面、「人間関係の構築力」が低下したことは、教職の職業特性として好ましくなく、今後、改善策が必要であると考えられる。

#### 6) 人間社会学科

本学科は、学問領域の多様性を重視した教育を行っていることが特徴である。そのため、様々な学問領域に幅広く触れることを主要な学びとする初年次生においては、他学科と比べると専門知識・専門技能を習得したという実感が比較的弱い、学年が上がるにつれて専門性の習得の実感が強まっていくことが示された。

#### 7) スポーツ健康学科

474名中293名から回答を得られ、回答率は61.8%であった。その結果、授業への出席やクラブ・サークル活動に費やす時間が大幅に増加した。一方で、学習に対する質的向上を必要とする傾向も認められた。

8) 薬学科

昨年度と大きな変化はなく、特に問題はなかった。なお、読書や自主学習などの自己啓発につながる時間が比較的少なく、時間をより増やすような取り組みが必要だと思われる。

[ 1. 基本的分析]

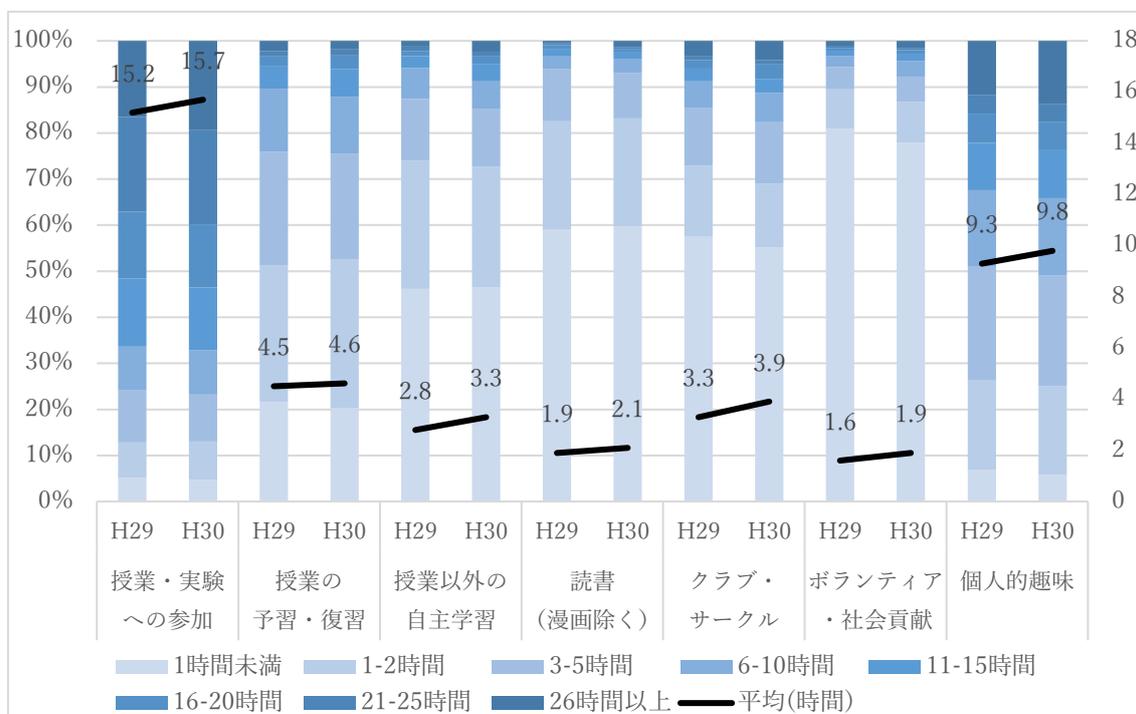
【調査の回収状況】

H30年度	対象者数	回答者数	回答率	参考:H29	参考:H28	参考:H27
日本語日文学科	219	103	47.0%	87.1%		
歴史文化学科	223	130	58.3%	71.1%		
幼児教育専攻	498	169	26.7%	11.1%		
学校教育専攻	364	176	38.2%	46.2%		
特別支援教育専攻	133	45	15.5%	42.1%		
人間社会学科	341	306	89.7%	80.0%		
スポーツ健康学科	474	293	61.8%	52.4%		
薬学科	897	423	47.2%	50.2%		
<b>全学</b>	<b>3148</b>	<b>1645</b>	<b>55.3%</b>	<b>58.2%</b>	<b>81.6%</b>	<b>58.1%</b>

・29年度に Web 方式に移行してから、学生への回答要請はゼミ教員や moodle、掲示板を用いて行われている。そのため、学外実習中などで学生が通学できない場合や、ゼミ教員の方針によって数値は大きく左右される。教員監督の下で回答させる場合には数値が上がるが、口達のみで、後は学生の自主性に任せる場合には、数値は大きく下がる。また、督促も、未回答者に対する一斉メールは大学のメールアカウントに対して送信されるため、見ていない学生が多い。メールの転送が未設定、SNS しか利用しない者も多い。回答率向上のための工夫が必要である。

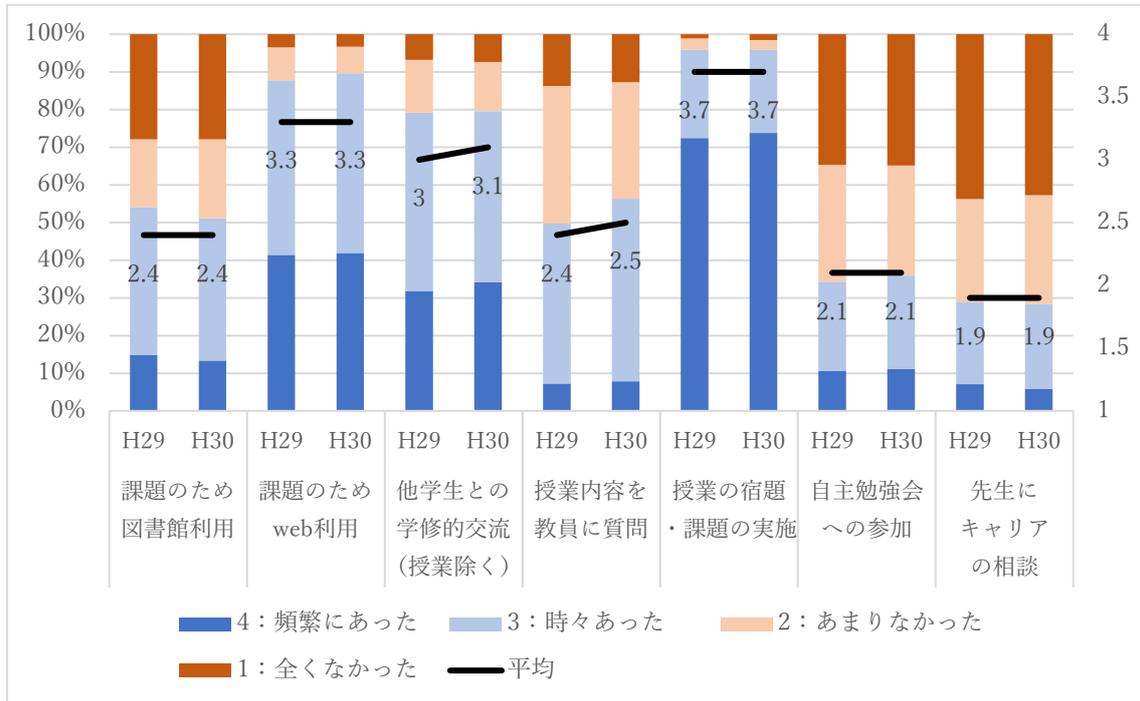
(注) 以下のグラフで、同じ数値をつないだ平均値の線分がやや傾いている場合は、小数第2位の値の違いである。

図1【一週間の時間の使い方(7項目)】全学(H29:N=1830)(H30:N=1645)



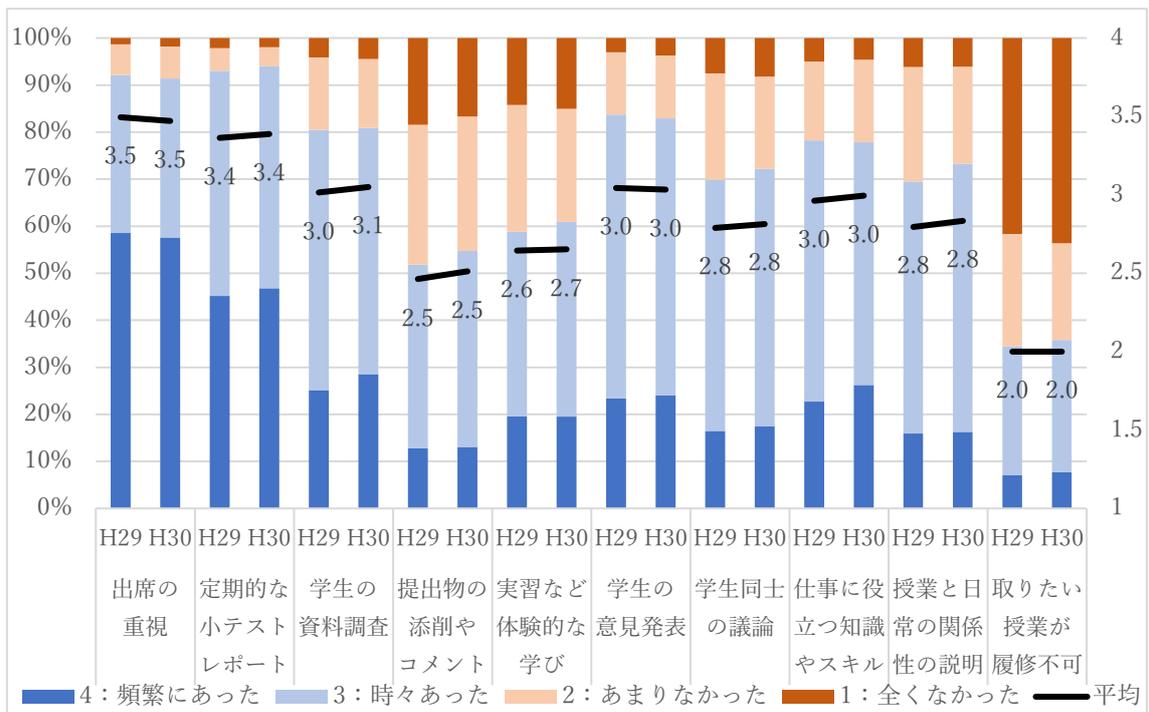
・全体的に大きな変化は見られない。一方、項目別にみると、「(3) 授業以外の自主的な学習をする」「(5) クラブ・サークル活動をする」「(7) 個人的な趣味活動をする」の3項目で0.5時間程度の伸びが認められる。特に(3)では、11-15時間の割合が、2.6 ⇒ 3.8(%)、16-20時間では、1 ⇒ 1.6(%)、26時間以上においては、1.3 ⇒ 2.4(%) と大幅に増えた。このことが(3)の時間増加の原因となっていると考えられる。これは、資格・免許取得のためのセミナーや学習支援、教員採用試験・薬剤師国家試験合格を目指した自主学習スペースの設置などを進めた効果であると考えられている。CAP制によって、週当たりの履修科目数が制限されているため、授業時間外に自主的に学修する時間を確保し易くなっているということが影響していると思われる。今後も、授業時間外の学修を促し、その実績を把握する仕組みを継続的に運用して成果を可視化し、個別にフィードバックして自主学習時間増加を顕彰することは、学修の動機づけの推進力となると確信する。

図2【大学の授業や授業以外の学修に関する活動（7項目）】



・昨年度調査の結果に比べ、「他学生との学修的交流（授業除く）」、「授業の内容を教員に質問する」微増した。全体として大きな変化はない。「授業の宿題・課題の実施」で「4：頻繁にあった」とする群が70%を超えるのは学修への真摯な姿勢の現れと評価できる。

図3【授業での経験（10項目）】



・「学生の資料調査」「仕事に役立つ知識やスキル(を学ぶ)」の2項目で[4:頻繁にあった]とする群が増加した。これは図1で「授業以外の自主的な学習をする」が増えたことが影響していると思われる。

図4-1【大学入学時と比べて身についた能力・知識(1~9)/17項目】

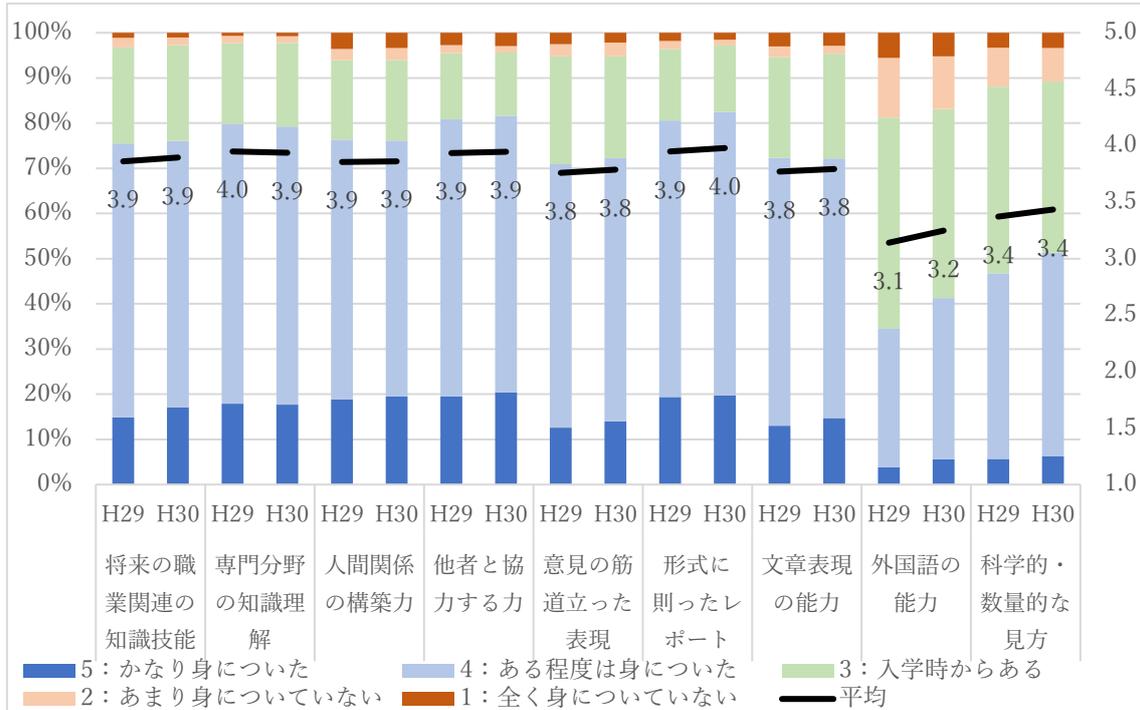
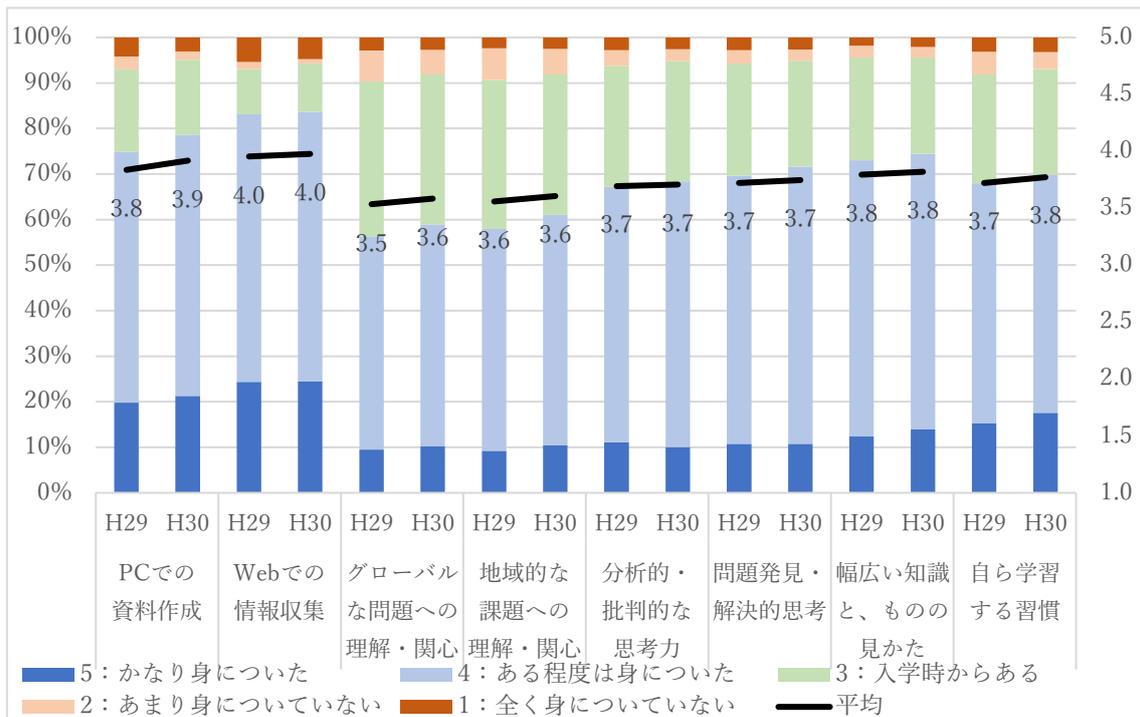
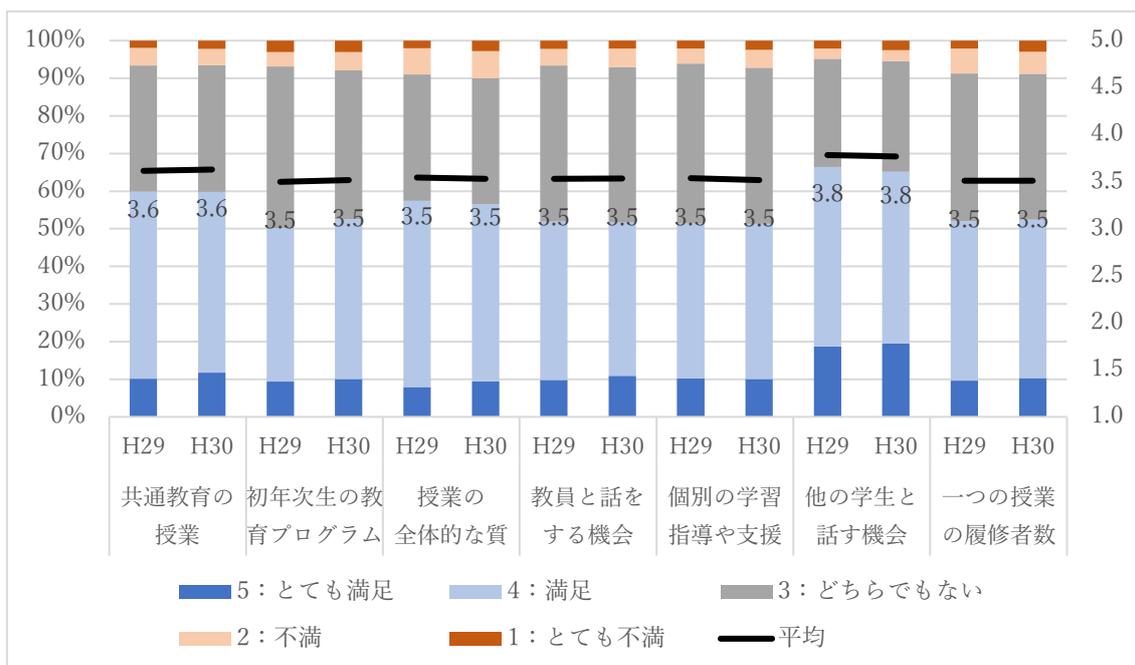


図4-2【大学入学時と比べて身についた能力・知識(10~17)/17項目】



・前年度に比べ大きく変化した項目はない。一方、(a)「外国語の能力」、(b)「科学的・数量的な見方」において「5：かなり身についた」「4：ある程度は身についた」とする群が少ない。薬学科では、平均値が(a):3.10, (b):3.70 なので、(a)は大学全体、(b)は薬学科以外の学科ではかなり大きな問題である。教育課程の見直しが必要である。

図5【教育内容の満足度（7項目）】



・前年度に比べ大きく変化した項目はない。全体に満足度は高いと考えられるが、「他の学生と話す機会」は他の項目より「5：とても満足」「4：満足」と回答した学生が多く、少人数での授業・活動が多い本学の特徴を反映していると思われる。

## [2. 総合考察]

ほぼ例年並みであるが、変化として以下の点が挙げられる。

### 1. 自律的な学習の習慣がついてきている

根拠：「授業以外の自主的な学習をする」時間が増加し、授業での経験として「学生の資料調査」「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」といった授業時間外の活動と思われる項目でそれを自覚する群が増えた。

### 2. CAP 制による授業時間の制限が自主的活動を活発にしている

根拠：自主的活動、「クラブ・サークル活動をする」「ボランティアなど社会貢献活動をする」「個人的な趣味活動をする (TV、ゲーム、インターネット、SNS 等を含む)」の時間が増えているが、「授業や実験等に参加する」「授業や実験等の予習・復習、課題をする」時間は減らず、むしろ増えている。

これまで、本学学生のマイナス・イメージとして「大人しく、積極性がない」という印象を聞くことが多かった。また、将来に対する不安からできるだけ多くの単位や資格を取得しようと履修科目を詰め込み過ぎ、必ずしも深まりのある学習がなされていなかったという傾向もある。しかし、今回の結果は、学生は自律的に学習する積極性を持ち、専門的な知識や能力を身に付けようと努力していると読み取ることができる。CAP・GPA 制度による学修指導の浸透が図られていること、さらに GPA の低い学生に対する学修指導を組織的に行っていることの効果ではないかと推察される。教育課程の自由度を増すだけでなく、ディプロマポリシーに沿って精選し、彼らに身に付けてほしい力の到達度を、自身で振り返り軌道修正できるように環境を設定してやることが、彼らの学士力を高めると確信する。

今後は個人の経年変化を確認し、GPA と学修行動・その自己評価がどのように関連しているかを分析し、教育課程・指導方法の改善に活かしたい。

以上